

腐り目陰陽師

ちよむすけMK II

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

腐った目をした少年、比企谷八幡は陰陽師として駒王学園に通っている。彼はムラサメという少女と共に日夜、はぐれ悪魔などを滅していた。そんなある日、クラスメイトの兵藤一誠が墮天使に襲われている場面に直面する。そこから彼の戦いは激しさを増していくこととなる。

4話

3話

2話

1話

目次

34

23

9

1

1話

「…………主人」

「…………なんだ？」

草木も眠る丑三つ時、月の光さえ無い、そんな夜のある森に二人の男女がいた。一人は猫背で頭にアホ毛を生やし特徴的な腐った瞳を持つ少年、もう一人はかなり小柄な緑色の長い髪に赤い瞳で黒を基調とした着物を赤い帯で締め宙に浮いている少女。二人は人気の無い森をただひたすらに進んでいた。

「吾輩はもう…………眠いぞ…………」

「いや、なら、なんで着いてきたんだよ…………」

少女の方はうつらうつらとしており今にも夢の世界の住人になりそうな勢いだった。それに対し少年は一緒にいくと聞かなかった少女に対して半ば呆れたような視線を向ける。

「それは…………主人が心配で…………」

「…………そうか」

少女が自分の気持ちを吐露すれば、その言葉に嘘が無い事を知っている少年は気恥ず

かしさに頭を掻く。そして、少年は少女の前行き少し腰を屈めた。

「…………おぶつてやるよ」

「うむー」

少女は少年の言葉に即座に飛びつき、少年に背負われた。少年は背中に少女の温もりを感じながらまた、歩き出した。

少年が再び歩き始める事十数分、少年はおもむろに足を止めた。

「…………主人」

「ああ」

少女は少年に背負われた時から眠気はどこに行つたのか上機嫌に鼻歌を歌つていたのだが今はその表情は自身の不機嫌さを表している。対して少年の方も面倒だと言わんばかりの表情をしていた。二人は揃って同じ方角を見ており、その方角から微かにだが足音のようなものが響いてきていた。その音は次第に大きさを増していき、ついにその正体を現した。それは、人でもなく、既存の動物とも異なる姿をしていた。蝙蝠の羽のようなものを背中から生やし獣の手足を持ち体は筋肉で肥大化し3mは超えている。そして、頭部は球状で口しか存在しない。そんな異形。その異形は二人の方に口しかない頭部を向けるなり、右腕を振りかぶりながら襲い掛かしてきた。それを見て少年は即座に後ろに跳び距離をあげ、背中の少女を降ろした。

「無粋なやつめ」

「ムラサメ、少しさがってる」

ムラサメと呼ばれた少女は少年に言われた通りに少し距離をあけた。そして少年の方は腰に下げている黒いケースから札のようなものを数枚取り出し右手の指に挟む、そして、それらを一齐に異形目掛けて投げつけた。

「——燃えろ、火行符^{かぎようふ}」

少年がそう呟けば忽ちその札は火の玉に変わり異形を包みこんだ。

「ガアアア……グア……アツイイイ」

異形は全身を炎に焼かれる痛みからか咆哮を上げる。そして、最期の足掻きのように燃えながら少年に突っ込んで行く。それを少年は避けるでも無く、今度はケースから二枚の札を出した。その内一枚の札を異形の突っ込んできているほうに投げる。

「結」

少年がそう紡げば投げた一枚の札を起点に光の障壁が現れる。異形はその障壁に真正面から衝突し途轍もない轟音をたてた。しかし、障壁には罅すら入らない。少年は手に一枚の札を持ちながら瀕死の異形に一步ずつ近づいていく。

「……ガア……」

異形はもはやその場から動く事もできない。少年は右手に持っている札に靈力と呼

ばれる力を込める。すると、札は一瞬発光しその形を銀色の短銃に変えた。少年はその短銃を異形の頭部に向け、引き金に指を掛けた。

「……何か言い残すことはあるか？」

「……………」

少年の問いかけに対し異形は沈黙していた。それは、もう喋るだけの力が残って無いかからか、はたまた己の死を受け入れたのか……。

「……そうか」

少年は引き金に掛けている指に力を込めた。そして、深夜の森に一つの銃声が木霊した。

「おきろーご主人」

もはや聞き慣れてきた少女の声が俺の鼓膜を震わせる。俺はその声に従い少しずつ目を開いていく。そして、目にしたのはいつものように浮かびながらこちらを眺める少

女の顔。

「おはよう、ご主人」

「ああ……おはよう」

少女の名はムラサメ。ムラサメは今現在、俺が所有者となつてあるある刀の管理者？をしてる。何故、俺がその刀の所有者になつたかと言えば、俺の師匠が関係してくる。師匠と言うのは俺の陰陽師としての師匠だ。俺こと比企谷八幡は2年ほど前までは普通のぼっちの学生だった。奉仕部という部活にも入つていた。奉仕部は他者からきた依頼を依頼主自身が解決できるような手助けするという部活だ。そして、中学の修学旅行前にその奉仕部にある依頼がきた。その依頼を受けた時が分岐点だったのだろう。俺はその依頼の果てに奉仕部の部活仲間拒絶された。俺は、その時暫くその場に一人立ち尽くしていた。その時だ、俺は妖怪に襲われた。当然、当時一般人の俺は何もできなかった。恐怖で足は震え碌に走る事もできなかった。殺される。そう思った時助けてくれたのが俺の今の師匠だ。俺はその後、師匠に弟子にならないか問われ、弟子になる事を選んだ。俺はこの選択を後悔はしていない。その選択のおかげでできた繋がりが確かにあるから。

「ご主人、吾輩はばふえが食べたいぞ」

「朝からパフェは無いだろ……」

「最近ひとつも食べれてないぞー」

俺はムラサメを宥めつつ布団から起き上がり朝食の準備に取り掛かった。その間、ムラサメが騒ぐので今日の学校の帰りに買う約束をしたら、ようやく大人しくなった。

俺とムラサメが朝食を食べ終わり学校へ行く準備も終わったので学校へ向けて家を出る。俺は今現在、陰陽師の仕事として駒王町に住みその駒王学園に通っている。駒王学園には悪魔といわれる種族の者が幾人か通っていて、その中の二人ほど上級悪魔と言われる地位の高い者がいる。上級悪魔や最上級悪魔は悪魔の駒と呼ばれるチエスの駒を模した物を使い他者を己の眷属にする事が出来る。学園に通っている悪魔は上級の二人以外は皆二人の内どちらかの眷属だ。俺は陰陽師としてその二人の上級悪魔と連携してはぐれ悪魔と呼ばれる自身の主から逃げたり、殺したりした力に溺れた悪魔を討伐している。俺がこの地にいるのははぐれ悪魔がこの地に多くあらわれるからだ。

学園へと続く道をムラサメと歩いて見知った後ろ姿を見かけた。その後ろ姿の主もこちらに気づいたようで挨拶をしてきた。

「……おはようございます、比企谷先輩にムラサメちゃん」

「おはよう、小猫」

「おはようさん」

塔城小猫、同じ学園に通う後輩で悪魔。ムラサメと共に駒王学園のマスコットとして

かなりの人気をもっている。勿論、そんな二人といえる俺には周りから嫉妬の視線どころか殺意の視線が飛びまくっている。お家帰りしたい……。

「今日も相変わらず腐ってますね」

「それは目のことだよな……俺自体が腐つてるとかじゃないよな？」

「さあ？ どうでしょう」

この後輩、仕事上よく顔を合わせるのだがこうやって毒づいてくることが多い。まあ、その程度じゃ、何とも思わないのだが。塔城は甘いもの好きで唯一マツ缶の良さを理解してくれた同士だ。そのため、実家から送って貰っているマツ缶をお裾分けしたりもしている。その分塔城からお菓子を貰ったりもする。律儀な奴だ。まあ、マツ缶好きに悪い奴はいないということだな。

「比企谷く× 何、ムラサメちゃんと小猫ちゃんと仲良く登校してんだよ！」

「どうみたら塔城と仲良く見えんだよ……」

二人と学園に向かっていると一人の茶髪の少年が俺たちの方に駆け寄ってきた。この名は兵藤一誠、駒王学園で変態三人組の一人として有名だ。女子更衣室の覗きなど日常茶飯事、現に今もムラサメや塔城を見てだらしない顔をしている。そして、今も塔城にゴミを見るかのような目で見られている。

「どう見たらって、そのまんまだよ！」

「いやいやいや、ムラサメはともかく俺と塔上が仲良いわけないだろう？ 痛ッ」

そんな事を俺が言った瞬間、俺の足に激痛が走った。目を向けてみれば塔上が俺の足を踏み付けていた。ほらな？ 仲良くなんてないだろう？ (涙)

「そうですね、比企谷先輩なんかとは仲良くなんてないです」

素晴らしい、塔城は歩く速度を上げ一人で学園に向かって行った。

「八幡、小猫はどうしたのだ？」

「俺に分かるわけないだろ……」

ムラサメが聞いてくるがそんなのは俺が知りたい。ああ、ムラサメには一般人のいる所では別の呼び方にもしてもらっている。それでもしないと、ご主人なんてムラサメに呼ばれてると知られたらほぼ確実に俺の命が危ないだろうからな。

そんな事がありながらも俺たちは学園へとたどり着いた。はあ、早く家に帰りたい……。

2話

学園への登校中に塔城に足を踏まれたりなどしたが無事に俺たちは学園へとたどり着き、今は自らの所属するクラスでホームルームが始まるのを待っていた。ちなみに兵藤はどっかに行った。まあ、大方朝練終わりの女子の着替えでも覗きに行っただろう。俺はいつも通りイヤホンを付け寝たふりに入ろうとする。しかし……

「あら？ 比企谷じゃない、何？ 今日ムラサメちゃんと夫婦仲良く登校してきたの？」

「誰が夫婦だ……」

「そ、そうだぞ！ ……夫婦……なんて……」

今しがた登校してきた眼鏡に三つ編みの女子生徒が俺とムラサメにからかいの言葉を掛けてきたため寝たふりに入れなかった。この女子生徒は桐生藍華といい、変態三人組の事を嫌っていないこの学園でも稀有な存在であり、目が腐っている俺にも話し掛けてくる。と言っても内容はほとんどがからかいのそれだが……。それに、ムラサメの事も気にかけてくれている。正直、俺はムラサメが学園でやっていけるか少し心配していたのだが、そんな心配など無意味だったようで今や学園のマスコットの一人として愛さ

れている。それでも最初は日本人離れした可憐な容姿からか話しかける者はいなかった。そこで最初にムラサメに話しかけたのが彼女だ。そこからは他の生徒達も段々とムラサメに話しかけるようになり今にいたる。ちなみに俺に話しかけてきたのは兵藤達変態三人組だけ……。

「でも、一緒に住んでて毎晩合体してるんでしょ？」

「んなわけねーだろ……」

「なッ」

桐生には感謝しているのだがこういうのは勘弁してほしい。純粋なムラサメなんて顔がトマトのように真っ赤だぞ。そんなやり取りをしていると廊下の方から騒がしい足音が三つ分近づいてきた。

「おい□ 比企谷、親戚同士だからってムラサメちゃんと毎日一緒に登校なんてうらやましいぞ！ コノヤロー！」

「そうだ！ そうだ！ うらやましいぞ！」

「爆発しろ！」

その騒がしい足音の正体はボロボロになった兵藤含めた変態三人組だ。ボロボロなのは覗きが女子にばれてやられたのだろう。こいつらも、こりないな……。変態三人組は兵藤の他に丸刈り頭でセクハラパラッチの異名を持つ松田と眼鏡を通して女子の

スリーサイズを知る事ができるという元浜がいる。中でも元浜はロリコンでムラサメとよく一緒にいる俺によく突つかかってくる。ちなみに、ムラサメは俺の親戚という事になってる。なぜなら前に同じ家から出てくるのを此処の生徒が目撃しそれが学園に広まりちよつとした騒ぎになったことがあった。その時に俺たちは騒ぎを広めないために遠い親戚ということにしたのだが……。あの時はやばかった……。何がやばいつてほとんどどの生徒が血走り殺意の籠った目で俺を問い詰めてくるんだぞ……。本当に生きた心地がしなかつた……。そんな事を考えていると三人組がこちらに突っ込んでくる。

「「モテない男の恨み思い知れ!!!」」

勢いにタツクル的な事でもしたいのだろう。なので、俺は止まれなくなる距離まで引き付け静かに机から離れた。

「「グヘェ!!!」」

案の定三人は机に突っ込み大きな音をたてながら盛大に倒れこんだ。そんなバカな事をやっているうちにホームルームの時間が近づいてきたのか担任の先生が教室のドアを開け入ってきた。そして、俺たちの方を見て呆れたというような表情で一言

「お前からもうすぐホームルーム始まるからそろそろ席につけよ」

これである。もはや教師すら呆れるほどにこのような事が繰り返されていて注意す

らされなくなった。そんな感じで俺の朝の時間は過ぎていく。

「八幡！ 約束通り、ぱふえを食べに行くぞ！」

「その前にあそこに報告に行つたらな」

「む、仕方ない……早く済ませるのだぞ」

特筆すべき事もなくいつも通りに時は経ち放課後。本来ならすぐ帰宅するのだが今日はムラサメにパフェを買つてやる約束をしている。そのため、ファミレスにでも行くかとも思うのだが、もう一か所行かなければならないところがある。昨日、というか今日？ に滅したはぐれ悪魔についての報告をこの学園にいる上級悪魔の所に行かなければならない。

「ああ、俺も早く帰りたいしな」

「うむ！ それならばよい！」

本当に早く帰りたい……。ムラサメとそんな話をしていると兵藤達三人組も帰る準備が終わつたのかカバンを持ちながらこちらにやって来た。

「比企谷とムラサメちゃんはもう家に帰るのか？」

「いや、少し寄るところがある」

「そっか、俺たちはこれから女子達の部活動を見に行ってくるぜ！」

「はあ……ほどほどにしとけよ……」

「おう！　じゃあな二人とも！」

素晴らしい兵藤達は急いで教室から出て行った。こりないな、あいつらも……。

「俺たちもそろそろ行くか」

「うむ」

そして、俺とムラサメも兵藤達のあとを追うように教室をあとにした。

俺とムラサメは現在、この駒王学園にある旧校舎に続く道を歩いている。この学園にいる上級悪魔の二人のうち片方は生徒会の会長をしていて、もう片方はオカルト研究部という部活の部長をしている。基本的にはぐれ悪魔の討伐報告などは、オカルト研究部の部長をしている方におこなうようになっていて、そのオカルト研究部の部室が旧校舎にあるのだ。というか、悪魔がオカルト研究ってどうなんだ？

「あれ？　比企谷君たちは今日は部室にくるのかい？」

旧校舎へと続く道を歩いていると不意に声を掛けられた。その声のした方を向けば、さわやかな顔をした金髪のイケメンが立っていた。木場裕斗、駒王学園の王子様。文武

両道で多く女子生徒から絶大の人気を誇っており、兵藤達変態三人組や腐った目をして避けられている俺とは対局に位置するような奴だ。イケメンでも葉山のようにそりがあわないというわけではないがぶっちゃけ、俺はこいつの事が苦手だ。理由としては「比企谷君、よかつたら、後で手合わせしてくれないかな?」

「……嫌に決まってるんだろ……面倒くさい……」

このように、俺に会うたびに手合わせを申し込んでくるからだ。俺としては部活仲間とでも手合わせしてくれよと常々思う。

「今日は夜に滅したはぐれ悪魔の報告をしに行くだけだ……」

「相変わらず、凄い気配察知だね……僕たちは全く気付かなかったよ……」

今日の訪問の理由を話せば木場は申し訳なさそうにこちらを見てくる。

「はあ……気にするなって前にも言っただろ?ただ単に俺が気配に敏感すぎるだけなんだから……お前らは良くやってると思うぞ」

「でも……」

「だから、その顔やめろって……お前みたいなイケメンにそんな顔させてるなんて女子に知られたら俺が何されるかわかんねーだろうが……」

「ふふッ」

「……何が可笑しいんだよ?」

「いや、比企谷君はやっぱり優しいなと思って」

「……そうかよ」

木場との会話もそこに俺たちはオカルト研究部の部室前に到着した。その部員である木場が扉を開けば中には三人の美少女がいた。一人は朝にも会った塔城。もう一人は黒髪をポニーテールにしている大和撫子を髣髴とさせるような人。最後に燃えるような紅髪が特徴的な人。その三人がこちらを視認する。

「あら？ 今日はどうしたの？ ハチマン」

「あらあら、二人が来るんでしたらお茶請けを用意しておくんでしたわ」

「……」

まず、俺にどんな用なのか尋ねてきた紅髪の人が、この学園にいる二人の上級悪魔の内の一人リアス・グレモリー先輩。そして、困ったような笑みを浮かべてお茶請けを用意しておけばよかったと言っているのが姫島朱乃先輩。この二人はこの学園の二大お姉さまとして人気を博している。さつきからこちらを無視している塔城や木場を含め人気者だらけの部活だ。というか何故俺は塔城に無視されているのだろうか？ 周囲の人間に無視される事の多い俺も地味に傷つくんだが……。

「どうしたの？ 小猫」

「……別になんでもありません」

塔城の俺に対する反応が気になったのか、グレモリー先輩が塔城に尋ねるが依然、塔城は俺を無視している。まあ、塔城の事は後にして、先に本題を済ませるとしますか。

「グレモリー先輩、今日は昨日滅したはぐれの報告にきました…」

「……………昨日も出たの？」

「はい、まあ……………」

「そう……………ごめんなさいね、私たちは気づけなかったから……………」

この先輩も木場と同様に申し訳なさそうな顔を向けてくる。本当にこういう顔をされると対応に困る……………。

「木場にもさつき言いましたが気にしないでくださいよ……………」

「そういうわけにもいかないわよ……………私はこの土地を任されてるんだから」

グレモリー先輩は余程気にしてるのか俯いてしまう。こんな時、リア充なら甘い言葉でも掛けれるんだろうが、生憎俺にはそんな事はできない。だから俺にできる限りの言葉で伝えようと思う。

「俺だって仕事でやってるんで、さぼってるのが師匠に知られたら後が怖いですし……………本当は働きたくないですけど……………」

「ハチマン？」

「それにグレモリー先輩達は契約の方も取らなきゃいけないじゃないですか……………なら、

討伐の方は俺がやるのが妥当でしょう？」

グレモリー先輩は俺の言葉を聞いて少しの間呆けていたが、次第に笑みを浮かべるようになった。

「ふふッ……ありがとうね、ハチマン」

「……何のことですか？」

俺は正面からお礼を言われ気恥ずかしくなり顔を背けた。こうやって正面からお礼を言われるのには慣れてないんだっての……。

「ご主人はまだ終わらぬのかー吾輩は早くばふえが食べたいぞー」

「……パフェ？」

俺がグレモリー先輩と話しているとついに我慢の限界が来たのかムラサメが騒ぎだした。ちなみに何故か塔城もピクツと反応している。

「ああ、分かってるよ、グレモリー先輩俺達はそろそろ失礼します……」

「もつと此処にいてもいいのよ？　って言ってもそうも行かないみたいね」

「ええ、こいつ最近好物のパフェを食べてませんでしたから……今日した約束を余程楽しみにしていたみたいで……」

実際にムラサメは今日、放課後に近づくにつれテンションが上がっていた。それは、周りの生徒が見ても一目瞭然なほど。というか、パフェという単語が出てから俺を無視

していた塔城がずっとこっちを見てきてるんだが……。はあ……。しかたねえか

「……塔城もパフェ食いに行くか？」

「……部長」

「いいわよ、いつてらっしゃい」

「……………先輩のおごりなら行きます」

塔城はグレモリー先輩から許可を取った後俺にそんな言葉を投げかけてきた。まあ、何か怒らせちまったみたいだしそのくらいならいいか……。

「分かったよ……」

こうして塔城も一緒にパフェを食べに行くことになり三人で部室を出ようとしたところで呼び止められた。

「そうだ、ハチマンそろそろ名前で呼んでくれてもいいのよ？」

「私もですわ」

「二人を名前呼びとか俺にはハードル高すぎるんで勘弁してくださいよ……」

ホントに勘弁してほしい、この学園の生徒というか兵藤達に何されるかわかったもんじやない……。

オカルト研究部の部室を後にした俺達はファミレスに向かうべく学園を出ようとしていたのだが、学園の校門付近で変なものを見つけた。

「ぐすツ……くそくそなんで一誠の奴がく」

「裏切りものく」

変態三人組の内、松田と元浜の二人が泣き崩れていた。兵藤は見当たないが何があつたんだ？まあ、面倒事に巻き込まれたくないしきつさと行くか……。

「ん？」

あ、気づかれた。

「比企谷く一誠がく」

「……取り合えず落ち着けよ」

結局、その後二人から何があつたのか聞いたのだが、何やら兵藤が他校の女子生徒から告白されたらしい。なんでも、校門前を通った時にいきなり告られたのだとか。しかも、面識のない相手から。そこで、デートをするとき。怪しすぎだろ……。兵藤はいどころもあるにはあるがいかんせん覗き魔などの悪評のほうが多い。そんな奴に他校の見知らぬ奴が告白。何かある可能性が高いかも……。ついさつき、この辺りに墮天使の気配を感じたし、たぶん兵藤の神器を狙つてるとかそのへんだろ。

「というか、比企谷……ムラサメちゃんはまだ分かるが何で塔上小猫ちゃんと一緒にい

るんだ?」

あー、まずいなこりや……。仕方がない俺に怒りの矛先が変わる前に

「そんな事より兵藤の事はどうするんだ? このまま見守るのか?」

「んぐツ……。まあ、あいつもいい奴だし彼女ができるのは俺達も喜んでやるけど……」

「それでも、一発くらい殴らなきゃ気がすまねえ!」

よし、話は逸らせたな。その分、兵藤が殴られるのが決定したが……。まあ、大丈夫
だろ。兵藤よ、俺のために犠牲になつてくれ。

「じゃあ、俺はお前たちの事、応援してやるよ」

「ひ、比企谷!」

二人は感動したように俺を見てきている。今がチャンスだな……。

「そんじゃ、俺達はこの辺で……」

「ああ、またな!!」

何とか無事に突破できたな。兵藤……。お前の犠牲は忘れない。三分くらい……。

そんなでもって、ようやくファミレスにたどり着くことができた俺達三人は席につきそれぞれ注文を済ませる。俺はドリンクをムラサメと塔城はパフェをそれぞれ注文した。

「やっと、ばふえが食べれるぞ！」

「……良かったな」

「……パフエ」

ムラサメはかなり上機嫌になっている。塔城のほうも心なしか機嫌がよさそうだ。そして、注文した物が届き手を付け始める。その中で、パフエを口にした瞬間ムラサメの瞳は輝きだした。

「甘い、甘くて美味しいぞ、ご主人！」

「美味しいのは分かったから今はご主人はやめてくれ……」

よほどおいしかったのか俺の呼び方まで戻ってしまっていた。勘弁してくれよ……。ほら、近くの客なんかこっち見てひそひそと話してるし……。そりゃあ、目の腐つた男が美少女二人を連れてしかも、ご主人なんて呼ばれてりゃ、怪しさ満点だろうが……。通報だけは勘弁してください……。

「……塔城も美味しいか？」

「……はい」

そうか、それは何よりで。塔城は朝の不機嫌さと感じさせることなく一心不乱にパフエを食べ進めている。こうしてみると二人とも小動物みたいで駒王学園のマスコットと言われるのも理解できる。そんな事を考えている内に二人は食べ終わってお

り、また、パフェを注文していた。って、あれ？

「……一つだけじゃないんですか？」

「しばらく食べてなかったんじや、ひとつで足りるわけなからう？」

「……比企谷先輩はひとつだけとは言いませんでした」

いや、確かに一つだけとは言っていないけども……。とうか塔城さん？ 貴方やけに

楽しそうじゃありません？

「おかわり、おかわり！」

「……パフェのおかわりお願いします」

そんな感じで二人はパフェを食べていき俺はそこそこの額を支払うことになった。

次からはちゃんと個数の指定もしよう……。

3 話

俺の財布がパフエの支払いで少し軽くなった日の翌日。今日も俺はムラサメと共に駒王学園に向かっていた。道中に兵藤が呻き声を上げて倒れていたが何かあったのだろうか？ きつとまた、女子にでもやられたのだろう。

「ツ痛て〜松田と元浜の奴〜」

松田と元浜なんて呟いているように聞こえるのもきつと俺の気のせいなのだろう。……うん、そうに違いない。しかし、実際問題兵藤が堕天使に狙われている件に関してはどうするべきか……。いきなり、お前の彼女は堕天使でお前の持つ特別な力を狙っている。なんて言われても信じる奴なんて、まず、いないだろう。むしろ言った側の頭の方が心配される。信じるのはせいぜい材木座のような奴くらいだ。だとすれば、いつそ始末ないし捕縛を今日にでもおこなってしまうのがいいんだろうが……。グレモリー先輩には堕天使が近くに居る事は一応昨日のファミレスで塔城に伝えるように言っておいたから、その堕天使の独断という情報が確定するまで一先ずは様子見に徹するべきか……。一応、悪魔と協力関係にある俺が不用意に堕天使に危害を加えて戦争なんての

は避けたいしな。

「何か考え事か？ 八幡」

「ああ、ちよつとな……昨日の墮天使について考えていた」

「ふむ、結局どうするのだ？」

「今は取り合えず様子見つてとこだな」

よつぽど俺は考え事に熱中していたのだろうかムラサメに尋ねられ俺は取り合えずの今後の方針について話した。

「まあ、妥当な判断じゃな」

ムラサメも概ね賛同してくれるようだ。今できるのは墮天使の動向に注意しながら兵藤を尾行して、いぎというときを守るくらいか。男の尾行なんて気が乗らないが……。いや、女だから乗るってわけでもないが。つと、今後の事を考えながら歩いていながらどうやら学園についたようだ。これから墮天使の事が解決するまで兵藤を尾行しなければならぬ事を思い陰鬱としながらも俺は下駄箱で上履きに履き替えた。

「……比企谷、少しいいか？」

授業などは滞りなく進み、現在は放課後。兵藤達は今日も女子の部活動を見るんだろうと思ひ、その間に一応グレモリー先輩のところに顔を出すかと思つた矢先に兵藤に声を掛けられた。

「ああ、かまわないぞ……」

普段なら何かにつけて断るのだが、今は兵藤と行動する方がいいかと思ひ承諾した。それに兵藤の顔はいつもと違い真剣そのものだった。

「それじゃあ、まず最初に……俺さ、彼女ができたんだ……」

「……自慢か？」

真剣な顔をしたと思ったら彼女の自慢がしたかっただけかこいつ？

「いや、そうじゃなくて……俺さ今まで彼女なんてできたことなく、それで、今度のデートどうすればいいか分かんなくて……でも、夕麻ちゃんにはデートを楽しんでもらいたいんだ！ だから、一緒に計画立てるの手伝ってくれ!!」

そういう兵藤は俺に頭を下げてきた。こいつがそこまで相手の事を考えていたのは正直意外だった。俺としても兵藤の行動が把握できるのは助かるのだが……。

「何で俺なんだ？ 俺だつて彼女なんてできたことないぞ？」

「比企谷ならムラサメちゃんとかよくいるから、女の子の事よく分かると思つて……」

「……一緒にいるが他の女子のことなんて全くわからないぞ？ それに松田と元浜はどうなんだ？ あいつらなら力になってくれそうだが……」

俺がそう言うのと兵藤は顔をしかめた。

「あいつらにそんな事相談なんてしたら嫌味みたいになっちまうだろ……あいつらとは

これからも友達でいてえんだよ……」

ああ、松田や元浜が兵藤の事を本当は祝福してるように兵藤も二人の事を本当に大切に思っているんだろう……。だからこそ、兵藤は二人には相談できないと思っっている。それが、勘違いとも知らずに。あの二人ならきつと最期まで真剣に手を貸してくれるだろうに……。

「……分かったよ、手伝ってはやる……けど期待はすんなよ……」

「本当か！　ありがとう比企谷！」

俺は結局兵藤に手を貸す事にした。あの二人にも黙っておくつもりだ。今回の件は恐らく兵藤の心にトラウマをつける事になるかもしれない。そんな事にあの二人を少しでも関わらせるのに気が引けた……。

その日の放課後はムラサメにはオカルト研究部で待っていてもらい俺は兵藤のデートプランと一緒に練る事になった。俺達二人は四苦八苦しながらもなんとかデートプランを立てる事ができた。

「できたー！」

「……疲れた」

兵藤は喜びながら腕を広げ対照的に俺は机に突っ伏していた。デートプランを考え

るのってこんなに大変なの？リア充達も大変なんだな……。

「ありがとな！ 比企谷！」

「おう……」

「それじゃあ、今日は帰るわ！ 今度何か奢ってやるからな！」

「まあ、期待せずに待ってるわ……」

そう言うなり兵藤は立ち上がりカバンを持って教室を出て行った。さて、俺もムラサメを迎えに行つて兵藤の後を追うとするか。

俺はオカルト研究部にムラサメを迎えに行つたら兵藤のあとをつけるつもりだったのだが当初の予定と変わつてそのままオカルト研究部で今後の話し合いをすることになった。ちなみに兵藤の護衛は現在、木場がしているらしい。そんなわけで今はオカルト研究部の部室のソファに座り、姫島先輩の出してくれた紅茶を飲んでゐる。相変わらず美味しいな……。この先輩の淹れた紅茶は……。

「それでハチマン、墮天使の数と拠点は分かつてるの？」

紅茶に舌鼓をうっているとグレモリー先輩に尋ねられた。まあ、塔城には墮天使がい兵藤を狙つてるといふ事しか言つてないしな。

「数は四人で拠点は少し離れたところにある廃教会です……あと、その廃教会に少しずつ人の気配も集まっています……」

「そう……、人の気配は恐らくはぐれエクソシストでしょうね……」

「俺もそうだと思います……」

グレモリー先輩は俺から情報を聞くと何かしら考え事をしだす。おそらく、その墮天使達の独断と確定するまでにこちらがとる行動だろう。そして、少し間を置いて考えがまとまったのか部室内にいる全員に向けて声を発した。

「それじゃあ、こうしましょう……私と朱乃と裕斗で廃教会のほうを探るから小猫とハチマンでその兵藤一誠君の護衛をしてくれないかしら？」

「俺はいいですけど……塔城はそれでいいのか？」

男よりも女同士の方がいいんじゃないのか？

「……私もかまいません」

俺の考えとは裏腹に塔城もすんなり了承したので俺は塔城に兵藤のデートの日時を知らせ塔城との集合場所なども決め、今後の方針も固まってきたところで俺とムラサメはグレモリー先輩達に別れを告げ部室をあとにした。

家への帰り道、俺はいまだに迷っていた。兵藤を危険にさらしてまで様子見に徹することに。確かに不用意に墮天使に手を出せば最悪戦争に発展し多くの命が失われる可能性がある。しかし、そのために兵藤を切り捨てるような真似が本当に正しいのか

……。そんな事を考えていれば急にムラサメが俺の前に躍り出て。

「ご主人、吾輩はご主人がどんな選択をしようと共にいるぞ……」

「ムラサメ？」

「吾輩とご主人はずっと一緒じゃ」

そう言つて俺に笑顔を向けて来た。どうやらムラサメには俺がまだ迷っていることがバレていたようだ。ああ、でも、そうだったな……。今の俺は一人じゃ無かつたな……。

俺一人ならともかくムラサメまで危険な目にあわせるわけにはいかねーよな……。なら、覚悟を決めるか……。兵藤を危険な目に合わせても絶対に死なせはしないという覚悟を……。

そうして、その日は過ぎていった。

兵藤と墮天使のデート当日、俺は鳥の囁りが聞こえ目を覚ました。塔城との集合時間までまだまだ余裕があるな。なので、俺は早めに出かける準備を済ませ、毎週日曜朝の楽しみofプリキュアを見ていた。やっぱり、プリキュアは最高だな！。

「ご主人」

おっと、どうやらムラサメも目を覚ましたようだ。俺はムラサメの朝食を用意しながら今日は家にいるようにという旨を話す。しかし、

「ムラサメ、今日は留守番してろ……」

「なッ！ 吾輩も共にいくぞ、ご主人！」

やはりというかムラサメは納得しなかった。それでも俺が兵藤を守っているうちに直接的な戦闘能力の無いムラサメに何かあるといけないので

「今日だけでも言う事を聞いてくれればパフェを好きだけ食わせてやるから……」

「ぐッ……そ、それでも共に行くぞ！」

パフェで釣ろうとしたのだが失敗した。おかしいな……。これでいけると思ったんだが……。

結局その後ムラサメを納得させるのに時間が掛かり塔城との集合時間に遅れ足を踏まれたりしたが割愛しておく。ちなみにムラサメは今度一日言う事を聞いてやるという事で一応納得した。不満ありありというのが顔を見れば分かったが……。

塔城と合流して暫く、塔城に踏まれた足がまだまだ痛むが何とか兵藤達のデートの集合時間まで間に合ったようで兵藤がそわそわしながら相手を待っていた。というか、塔城の奴、強く踏みすぎだろ……足の骨が砕けるかと思つたぞ……。俺達が兵藤を見つけてから十数分どうやら相手もきたようだ。兵藤と何か話しているようだが、どうせ『ごめ

ん、待った!』『いや、今来たとこだよ!』とかやってんだらうな……。

「……塔城、そろそろ動くぞ」

「……分かりました」

それから、俺と塔城は兵藤達のデートを尾行しながらついていき昼食時に兵藤達と同じ店で食べたのだが遅れた罰として俺が金を払うことになった。さようなら……俺の野口さん達……。

そして、夕方になりついにデートの最終地点の公園に到着した。公園の周辺には人払いの結界が張られている。おそらく此処で事を起こすつもりなのだろう……。兵藤はデート中ずつと相手の事を気遣っていた。きつと、俺が相手の考えを知っていたのを知ったら俺の事を恨むだろうな……。そして、ついに事態は動いた。墮天使の女が翼を広げ宙に浮かんだ。兵藤は呆然とその場に突っ立っている。だから俺は塔城に一言残し腰に下げている黒いケースから呪符を取り出しながら足に靈力を込め飛び出した。

「塔城、グレモリー先輩に連絡してくれ!」

「分かりました!」

墮天使の女は光の槍を形成し兵藤を貫こうとする。させるかよッ。俺は呪符に靈力を込め愛用する短銃を手に持ち引き金を引いた。そして公園に響く銃声。

「何×」

「なッえ？ 比企谷？ 何がどうなってんだよ！」

今の一発はただの牽制。俺の思い通りに墮天使の女は突然の銃声に動揺している。その内に俺は兵藤の前に出た。

「何？ 人間？」

「ああ、お前からからしたらただの下等な人間だよ……」

「その下等な人間が何？ ヒーローにでもなったつもり？」

「……まさか、俺はヒーローなんかにはなれねえよ……」

本当のヒーローなら兵藤を危険な目に合わせずに済んだんだろうよ……。俺は結局、兵藤が危険な目に合うのを良しとした……。

「なあ……比企谷、何が起こってんだよ……説明してくれよ！」

「……悪い兵藤……後で全部話すから少し待っててくれ」

今だに状況が理解できてない兵藤には悪いが今はこつちをどうにかしないとな……。俺は銃口を墮天使の女に向けて構える。

「兵藤の前でお前を撃つ事はしたく無い……今なら見逃してやる……」

「人間風情がこのレイナーレ様に勝てると思ってるの？」

墮天使はこちらを馬鹿にしたように笑みを浮かべ光の槍を手に持った。どうやら引く気は無いみたいだな……。俺は引き金を引こうとし

「何で比企谷が夕麻ちゃんに銃なんて向けてんだよ！」

銃を構えている手を兵藤に掴まれた。……まあ、こいつならそうするよな……。俺は靈力を体に纏わせ兵藤を力づくで振りほどこうとした、が、その時、今までこの場になかった人の声はその場に響いた。

「そこまでよ！　墮天使さん」

「……リアス・グレモリー先輩？」

突然の学園の有名人の登場に兵藤はまたもや呆然としている。その間に俺は兵藤の手を振りほどき再び銃を構える。そして、墮天使の女もこれは予想外だったよう

「その紅い髪……グレモリー家の者かッ」

「ええ、その通りよ」

「……いいわ、今は引いてあげる……良かったわね、イツセーくん命拾いして、まあ、生きていたところで大した神器は持って無いでしょうし」

グレモリー先輩の言葉を聞き墮天使の女はそんな言葉を残し去っていった。俺もそれに伴い銃を呪符に戻す。

兵藤がデートの最終地点に選んだ公園、その場にいるのは俺とグレモリー先輩、塔城……そして、状況が理解できずその場に立ち尽くす兵藤の4人だけだった。

4話

墮天使の女が去った後、公園に残った俺達は一度兵藤に詳しい説明をするためにオカルト研究部の部室に移動した。移動中、兵藤は一言も喋らなかつた……。

そして、部室にあるソファに兵藤とグレモリー先輩が向かい合うように座り話し合いは始まつた。

「こうして面と向かつて話すのは初めてよね？ 私はリアス・グレモリー、このオカルト研究部の部長を務めているわ」

「……兵藤一誠です」

「それで、兵藤一誠君……貴方は何から聞きたいかしら？」

「夕麻ちゃん……それから先輩達って何者なんですか？」

兵藤は今まで疑問に思っていたであろう事をグレモリー先輩に聞いた。真つすぐに先輩の目を見て。

「貴方と一緒にいた彼女は墮天使よ……そして、目的は貴方の殺害」

「……ふざけてんすか？」

兵藤の瞳にはあからさまな怒りの感情が見てとれた。そりゃあ、自分に初めてできた彼女が墮天使で自分を殺すのが目的だなんていわれたらキレるだろうな。しかも、こいつはその彼女の事を本気で好きになっていた……。デートの計画を立てる時だって友達と呼べるほど仲がいいわけでもない俺に頼るほどに真剣だった…。

「…貴方も見たはずよ？　彼女が黒い翼を生やして飛んでいるところを」

「…だからってそんなの信じられるわけ」

兵藤は彼女が墮天使という事が信じられないようだ。当たり前だ……。俺だって今でこそ信じているが普通に生活していたらきつと信じる事はできなかつただろう……。

「……そうよね、そうそう信じれる話でも無いでしょうし……先に私達の事を話しましよ

うか」

「先輩達の事……」

グレモリー先輩はそう言うのと周りにいる自身の眷属達を見渡し兵藤に真実を告げた。

「私達は悪魔なの……ハチマンは違うけど」

グレモリー先輩がそう言うとその場にいる俺と兵藤以外の全員が悪魔の翼と尻尾を出しピコピコと動かす。

「……それ、本物ですか？」

「ええ、もちろん…何なら触ってみる？」

「……じゃあ」

兵藤は近くにいるグレモリー先輩の羽を触って本物かどうか確かめているが…。一体どんな感触なんだろうか…。前から少し気になっていた。と、そんな事を考えていると俺の着ている服の袖が引かれた。

「……比企谷先輩も触ってみますか？」

俺の服の袖を引いた手の持ち主は塔城だった。っていうか何？俺ってそんなに触りたそうにしてたの？

「……はい」

「いや、俺喋ってないよね…。何で分かるの？ サトリなの？」

「……先輩は分かりやすいですから」

あつ、そうですか……。

「本物……みたいですね……」

「これで信じてもらえたかしら？」

「まだ半信半疑ですけど……」

「そう、まあ今はそれでかまわないわ」

どうやら俺と塔城が話してらうちに兵藤の確認も終わったようだ。

ん？ 何で全員そんな呆れたような視線を向けてくるんだ？

「ま、まあ、ハチマンの夢はともかく、ハチマンが陰陽師なのは本当よ？」

「……そうですか」

兵藤はどうやら納得してくれたようだ。だが……

「……比企谷は夕麻ちゃんの目的が分かってたのか？」

「こうなるよな……」。

「ああ、大体の見当はついてた……」

「じゃあ！ 何で！」「……待ってください」小猫ちゃん……」

兵藤の俺に対しての問いかけを塔城が遮った。おそらく兵藤は俺にどうして話してくれなかったのか、それを聞きたいんだろう……。当然だ。分かってて一緒にデートプランを考えていたりしたんだから……。しかし、塔城は何を言うつもりだ？

「……兵藤先輩は今も悪魔や堕天使について信じ切れて無いようですけど、もし、比企谷先輩が兵藤先輩が襲われるより先に彼女が堕天使という事を話したとして信じられましたか？」

塔城は少し責め気味に兵藤にそう言った。塔城はいつもより感情的になっているように思える。

「そ、それは……悪い、比企谷……」

「……謝るなよ、悪いのは俺でお前は何も悪くないんだから」

「そうだ……。こいつは何も悪くない……。」

「兵藤君、話を続けてもいいかしら？」

「あ、はい」

「そう、それじゃあ次は神セイクリッド・ギア器について話しましょうか」

「神器ですか？」

「どうやら次は兵藤が堕天使に狙われる原因となった神器について説明するようだ。ちなみに言っておくと俺には神器は宿っていないかった。龍の手でもあれば戦闘がずっと楽になるのに……。」

「えっと、つまり神様の作った便利アイテムが俺の中にあってそれが狙われたって事ですか？」

「ざっくり言うとなんかそうなるわね」

「でも俺、そんな物今まで見たこと無いですよ？」

「そりゃそうだ、普通に過ごしてれば一生関わる事が無いことの方が多いんだから。」

「じゃあ、出してみましようか」

「えっと……痛かったりします？」

「ふふつ、大丈夫よ、この部屋は神器が出やすいようになってるから……そうね、

貴方が一番強いと思うものを思い浮かべてみて」

「一番強いもの……」

兵藤は徐に両手の平の付け根どうしを合わせて腰辺りに構えた。つてまさか……。

「ドラゴン波アアア」

やっぱりそれかよ……。

俺が呆れていると兵藤の左手が光り出し光が収まると手の甲の辺りに赤い防具のようなものがついていた。

「これは……トウワイス・クリティカル龍の手かしら？」

「龍の手？ これってどんな物なんですか？」

兵藤は自分が狙われる原因となった物に対して複雑な表情を浮かべ見つめている。

「それは持ち主の力を二倍にするものよ」

「二倍……それって凄くないですか？」

まあ、普通の人間からしたら充分チートアイテムだよな。

「確かに人間からしたらそうでしょうね……でも、私達のような存在からしたら普通の人間の二倍くらいなら全く脅威にならないの」

「……そんなに差があるんですか？」

「ええ、ハチマンのような人間もいるけど、基本的に悪魔と人間の種族的な差は二倍程度

じゃ覆せないわ」

兵藤はそれを聞いて肩を落とした。大方、俺って実は凄いや？ とでも思っていたんだらう。

「兵藤君、神器も分かったところで私から提案があるのだけれど」

「提案？」

提案？ まさかグレモリー先輩……。

「これを見て頂戴」

「赤いチェスの駒ですか？」

グレモリー先輩が取り出したのはチェスのポーンの駒だった。

「これは悪魔の駒と言って他の種族を悪魔に変えて自分の眷属にできるの」

「悪魔に……」

「そう、それで兵藤君、貴方私の眷属にならないかしら？」

グレモリー先輩の提案は兵藤を自身の眷属に迎え入れるというもの。まあ、グレモリー先輩の眷属になれば堕天使や他の悪魔も手を出しづらくはなるだろうが……。

「俺がですか？」

「ええ、これから先も今回のように他の種族に狙われるかもしれない……もちろん私達も手を尽くすけどもしもの事があるかもしれない」

「ツこれからも……」

「私の眷属になれば少なくとも墮天使や悪魔は手を出しづらくなるはずよ」

「俺は……」

前までの兵藤ならグレモリー先輩のような美人に勧誘されたならすぐ食いついただろう……。ちなみに俺の場合は美人局などが一番に頭に浮かび断る。

「もちろん強制はしないしすぐに返事をする必要もないわ、ゆっくり考えて決めてくれればいいわ」

グレモリー先輩はそう言い兵藤に向け微笑みを向けた。

今日のところは此処までにしておきましょうか、ハチマン、悪いけど兵藤君を送って貰えないかしら？ 私たちはこれから契約の仕事があるの」

「別に構いませんよ」

「そう、ありがとう」

そして俺にも微笑みを向けてきた。恥ずいんでこっちを見つめないで！

オカルト研究部のある旧校舎を出てみれば辺りは既に暗くなっており時間を確認すればかなり遅い時間になっていた。俺達は無言のまま兵藤の家に向けて歩き出した。

そして、兵藤の家まで続く道の半ば程に差しかけた頃。今だに俺達の間には会話は無かった。普段から積極的に話す仲では無いが調子が狂うな。

「なあ、比企谷」

「なんだ？ 兵藤」

なんて思つてたら話しかけられた。フラグでもたつたのか？

「比企谷の家は陰陽師の家系なのか？」

「……いや、普通の家庭だ、陰陽師には今の俺の師匠に出会つてからなつた」

「じゃあさ、比企谷はどうして陰陽師の道を選んだんだ？ 他にも道はあつたんだろ？」

俺がどうして陰陽師になるのを選んだのか……。それは――

『……あなたのやり方、嫌いだよ』

『人の気持ち、もっと考えてよ……』

「……俺は逃げたんだよ」

「逃げた？」

「ああ」

……俺は二人と向き合うのが怖くて陰陽師という道に逃げた。

「逃げたことを後悔はしてないのか？」

兵藤に問われ考える。俺は今も奉仕部に囚われてるのかもしれない。あの時二人と向き合っていたらと考える事もあった。

「……正直、陰陽師になつてはぐれ悪魔や妖怪の討伐なんかの面倒な事だつてできた」

「おう」

……でも

「逃げたことは後悔してるかもしれない……けど、陰陽師になつた事を後悔はしてない」

今のムラサメやグレモリー先輩達のいる暮らしも悪くはないと思つている。

「そうか」

「ああ」

日も暮れ暗くなった道中、道の端に立つ街灯だけが俺達二人を照らしていた。

ちなみに俺が家に着き扉を開けた時。

「ぐくしゅくじゅん」

ムラサメが大層怒った様子で仁王立ちしていた。なんかオーラみたいなのも見えるんですけど……。

何でこんなに怒ってるんだ？ ムラサメが怒っている理由を考えてみるが……あつ、そういえば昼飯は用意してたけど晩飯は用意してなかったわ……。

「……」主人、何か吾輩に言う事はないか？」

笑顔だが目が笑ってないムラサメの問いに、俺は右手を丸め頭の方に持っていく
「……………へぺろっ♪」

この後、ムラサメから滅茶苦茶説教された。